

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

接触=伝統期におけるカナダ・イヌイットのキャンプ  
集団の構成原理について：  
一九三四年のケイプ・スミス・イヌイットの事例か  
ら

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5506">http://hdl.handle.net/10502/5506</a>

# 接触Ⅱ伝統期におけるカナダ・イヌイットの キャンプ集団の構成原理について

——一九三四年のケイブ・スミス・イヌイットの事例から——

岸上 伸啓

## 一 はじめに

伝統的なカナダ・イヌイット社会を居住集団の観点からみれば、世帯集団や複数の世帯からなるキャンプ集団が存在した。カナダの中部極北圏のイヌイットを研究したデイビッド・ダマス [DAMAS 1969] は、居住の最少単位を世帯、その世帯の集合からなる季節的キャンプ集団を狩猟集団 (hunting group)、毎冬に形成される最大のキャンプ集団をバンド (band)、いくつかのバンドを含み、一つの婚姻圏を形成する社会的範囲を部族 (tribe) と呼んだ。我々が、ネツリック・イヌイットやイグルーリック・イヌイットと呼んでいる社会的集合がダマスの言う部族に相当する。

ダマスによると、極北地帯にホッキョクキツネの毛皮交易が

導入され、確立をみた一九一〇年代から一九五〇年代にかけてのいわゆる接触Ⅱ 伝統期 (contact-traditional period) には、伝統的な社会単位に変化が見られたという [DAMAS 1988: 116]。ダマスが部族と呼んだ社会的集合は存続したものの、バンドは、毛皮交易のコミュニティ (trading community) へ取って代られ、狩猟集団は、狩猟Ⅱワナ猟ベースキャンプ集団へと変化した [ibid.: 116]。

本稿では、筆者が調査を実施した北ケベックのケイブ・スミス・イヌイットの接触Ⅱ 伝統期における季節的キャンプ集団の構成上の年周期的変化を記述し、その構成原理を究明してみた。なお、ダマス [DAMAS 1969, 1988] は、冬期のキャンプ集団をバンド、他の季節的キャンプ集団を狩猟集団と区別しているが、その区別を妥当化する根拠はないため、本稿では、ダマス

の言うバンドも狩猟集団も季節的（夏や冬）キャンプ集団と呼ぶことにしたい。

## 二 ケイブ・スミス・イヌイットの歴史的背景と概況

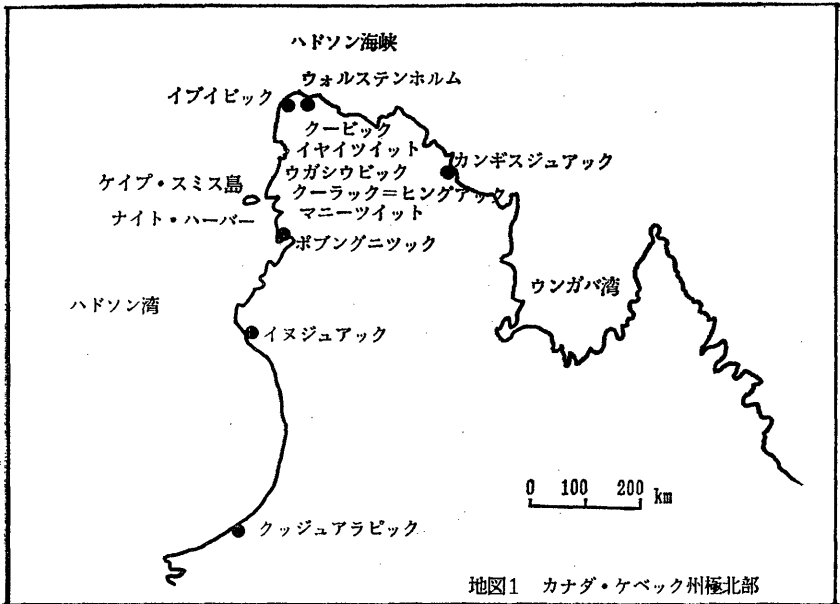
本稿で指すケイブ・スミス・イヌイットとは、一九二〇年頃から一九五五年頃まで、北はクービック (Kuuvik) から南はマニツイット (Maniuit) に至る領域で生活を営み、主にケイブ・スミス島にあったハドソン湾交易所でホッキョクキツネの毛皮交易を行っていたイヌイットの総称である（地図1）。

ケイブ・スミス地域には、今世紀初頭以前に、イヌイットが住んでいたことが知られているが[MORANTZ 1982]、一九一〇年代には、特定のイヌイット集団がこの地域を主要生活領域とはしていなかった。もともとは二つの異なる地域に住むイヌイット集団が、一九一〇年代以降にこの地方に導入されたイヌイットと白人との間の毛皮交易の影響下で、ホッキョクキツネ猟およびアザラシ猟のより良い狩場を求めて移動した結果、ケイブ・スミス地域に住みつきはじめた。すなわち一つのグループは、一九〇九年にハドソン湾交易会社 (Hudson's Bay Company 以下HBCと略称) が北ケベックのウォルステンホルム (Wolstenholme) へ進出したのを契機として、ウングア湾にあるカンギスジュアック (Kangisjuak) 付近から北上、そして西進し、現在のイブイビック (Ivujivik) 村付近へと移動し

てきた。一九二一年にケイブ・スミス島の近くにHBCの交易所（これは一九二〇年代後半にケイブ・スミス島上へと移された）が設立されたのを機に、そのイヌイットのグループは西側沿岸をさらに南下し、もう一つのイヌイット集団はポブングニツク (Povungnituk) 以南の地域から北上し、北限はクービックから南限はマニツイットに及ぶケイブ・スミス地域を主な生活領域とするようになり、そこで狩猟・漁撈や毛皮獣のワナ猟に従事するようになった「岸上 一九八八、一〇六一—〇七」。一九五一年に、ケイブ・スミス島上にあった交易所は閉鎖され、現在のポブングニツク村付近に移転されたことや、連邦政府の結核撲滅計画によってカナダ南部の都市にある病院へと強制収容された病人の帰りを待つために、ケイブ・スミス・イヌイットは、一九五〇年代の半ばに、北方行政の中心地の一つであったポブングニツク付近へと移住を余儀なくされた「前掲書、一〇七」。

一九二〇年頃から一九五五年頃までの期間は、ダマスが伝統的接触期と呼んだ時期に相当し、ケイブ・スミス・イヌイットは毛皮交易の影響下におかれつつも、カナダ連邦政府による政治統合の影響は弱く、キャンプ集団を社会・経済単位とし、いまだに移動生活を送っていた。

しかしながらHBCの交易人との毛皮交易は無視できないぐらゐの影響をイヌイットの生活に与えた。交易人は、極北地帯では、一月から翌年の四月にかけて毛皮の色合のよくなるホ



地図1 カナダ・ケベック州極北部

ツキョクキツネの毛皮やアザラシの毛皮をイヌイットから購入しようとした。交易人は、前年のイヌイットのワナ猟の実績を見積り、ワナ猟期が始まる前に、キャンプや狩猟の準備のために、イヌイットのハンターに前貸をしたり、ワナ具を与えたりした。イヌイットは、その前金でキャンプ生活に必要な品を購入し、秋および冬キャンプへ出た。冬期に、イヌイットは、ホッキョクキツネをワナでとり、その毛皮を、何回か交易所に持ち込み、前借りを返済していくとともに、小麦粉や紅茶などの食料品、衣類や服地そしてライフルや弾薬など狩猟道具を購入した。北ケベックのイヌイットがこの毛皮交易に積極的に参加したのは、一九一〇年に入ってからであったが、以降、一九五〇年代半ばまで、ホッキョクキツネのワナ猟は、冬場の中心的な生業活動の一つとなった。

### 三 狩猟—採集活動とワナ猟

極北地帯の一年は、ほぼ冬と夏という二つの季節から成るが、この季節の移行は、自然環境や動物の分布の周期的な変化を意味する。そして、イヌイットの生業活動の形態も季節毎に周期的に変化する。イヌイットによると、冬 (*wikua*) は、一二月から翌年の四月まで続き、春 (*upingaksab*) は四月、五月、夏 (*upingak*) は六月から八月まで、秋 (*wukikag*) は九月から一二月半ばまでである。

ケイプ・スミス・イヌイットにとって、特に重要な食料資源

は、周辺で一年中とれるワモンアザラシ、夏場のシロイルカとセイウチ、夏から秋にかけてのホッキョクイワナであった。次に、ケイブ・スマイス・イヌイットの一年の生業活動を概観してみよう。

### A 秋（九月—二月半ば）

秋期に重要な動物・魚類は、ワモンアザラシ、カリブーやホッキョクイワナ、湖や川にいる魚（イワナ、コクチマス、陸封性ホッキョクイワナ）などであった。ワモンアザラシは、キャックからライフルと銜を使って捕る個人狩猟であった。カリブーは、当時、この地域ではほとんど捕獲できなかったが、この時期のカリブーの毛皮は、冬服やマットレスをつくるのに最適であった。魚類は、網漁や釣など個人漁撈で捕獲された。

他に食料がない時には、タラヤカジカが沿岸部で釣られ、食料とされた。

以上のように、秋期の狩猟・漁撈活動は、個人的な活動であった。

### B 冬場（二月半ば—四月）

冬期の中心的な経済活動は、ワモンアザラシの呼吸穴を利用した狩猟（以下、呼吸穴猟と略称）とホッキョクキツネのワナ猟（以下、ワナ猟と略称）であった。時折、シロクマ、ホッキョクウサギ、イワナ、コクチマスや陸封性ホッキョクイワナを

取ったりしたが、これらの動物、魚類は、副次的な食料源であった。

呼吸穴猟自体は、集団猟ではないが、海水上に散在するアザラシの呼吸穴を見つけ、それを見張るためには、一時に多数のハンターを必要とした点で、一種の集団猟と言える。一方、ワナ猟は、二人一組か一人で行なう極めて個人的な猟であった。ここで注意しておく必要があるのは、アザラシの肉は、主要な食料となるが、ホッキョクキツネのそれはそうではないということである。ホッキョクキツネは、主に、毛皮交易のために捕獲されたのである。

冬期の経済活動のボタンは、三つ存在した [KISHIGAMI 1983]。夏場に多量の冬用食料を蓄えることができた場合、イヌイットは、自分たちやソリ犬の食料を心配することなく、冬期にワナ猟に専念できた。そして必要な時にのみ、呼吸穴猟に従事した。この経済ボタンをワナ猟重点型経済ボタンと呼んでおく。

夏場に、十分な冬用食料を貯蔵することができなかったが、冬場に多数のホッキョクキツネがいる場合には、イヌイットは、ケイブ・スマイス島周辺か秋キャンプ地の近くで呼吸穴猟に従事し、かつワナ猟に出かける。このような場合には、呼吸穴猟もワナ猟も同程度に重要であると考えられるので、この経済ボタンを呼吸穴猟Ⅱワナ猟均衡型経済ボタンと呼んでおきたい。

夏場の海獣猟が不猟であり、かつホッキョクキツネもあまり

見られない場合には、冬場にイヌイットはケイブ・スミス島に集まり、そして呼吸穴猟に従事し、時折、ワナ猟に出かける。この場合、呼吸穴猟が中心的な生業となるので、この経済パターンは、呼吸穴重点型経済パターンと呼んでおく。イヌイットは、その年々の状況（夏場の海獣猟の成果と冬場のキツネの数）に応じて、三つの経済活動パタンのうちのいずれかをとった。

### C 春（四月—五月）

春には、固定水のふち (ice edges) でのアザラン狩猟を行なったり、日光浴中のアザランをとったりした。春のアザランは最も生産的であり、余剰はすべて冬のために積み石貯蔵構 (cache) に蓄えられた。また、この季節には、湖の氷上からイワナ、コクチマスや陸封性イワナをとったりした。これらの狩猟や漁撈は集団猟というよりも個人猟であった。

### D 夏場（六月—九月）

ケイブ・スミス・イヌイットは、夏には多種の海獣や魚類などを捕獲したり、鳥の卵や野イチゴなどを採集した。

彼等は、カヤックを利用した海上でのアザラン猟（個人猟）以外に、シロイルカやセイウチを取るための集団猟を行なった。シロイルカやセイウチの余剰肉は、冬期の食料用に貯蔵された。また、この季節には、シロクマやカリブーなど陸獣をとること

もあったが、これらの狩猟は個人猟であった。

ケイブ・スミス地域では、ホッキョクイワナが特に豊富であり、主要な食料源となるが、この時代には、個人的な網猟が行なわれていた。また、タラやカジカが釣られ、補助食や非常食とされることがあった。

六月半ばから七月半ばにかけては、イヌイットは、ケワダガモの卵を採集したり、七月から九月にかけては、野イチゴづみを行なった。これらの採集活動は、極めて個人的な活動であった。

以上から、ケイブ・スミス社会では、冬と夏の一時期には集団猟が行なわれ、他の季節には、主に個人猟が行なわれていた。

### 三 ケイブ・スミス・イヌイットの居住集団

北ケベック・イヌイット社会では、一九一〇年代にはじまる接触=伝統期に入り、伝統的な生業の年周期や社会形態に変化が見られた。ここでは、一九三四年のケイブ・スミス・イヌイットの事例を用いて、キャンプ集団の季節的な変化を(1)キャンプ地、(2)期間、(3)規模および(4)構成の四つの点に焦点を合わせながら、記述してみたい。なお、このデータは、ケイブ・スミスのHBC交易所の記録と筆者のインタビュー調査に基づいている。<sup>(4)</sup>大別すれば、秋キャンプ、冬キャンプ、春キャンプ、および夏キャンプが存在したが、便宜上、秋キャンプから記述をはじめたい。

### A 秋キャンプ集団

九月も終りに近づき、ケイブ・スマミス島周辺でのホッキョクイワナ漁が終ると、イヌイットたちは、小規模のグループに分れて秋キャンプ地へと向った。

秋キャンプ地は、北からクービック (Kuuvik)、イヤイツ イット (Ijaitut)、ウガシウビック (Ugasiuvik)、ナイト・ハーバー (Knight Harbour) 1および2、クーラックヒヒングアック (Kuuraq-Qinguaq) およびマニーツイット (Maniut) の七地区であり、この七地区は、ワナ猟を行なうベースキャンプ地でもあった(地図1)。

イヌイットは、通常、九月末頃から、雪が積りはじめる一ヶ月頃まで秋キャンプ地で過した。ここでは、キャンプ地の地名をとって、それぞれのキャンプ集団をクービック秋集団、イヤイツイット秋集団、ウガシウビック秋集団、ナイト・ハーバー秋集団1および2、クーラックヒヒングアック秋集団およびマニーツイット秋集団と呼んでおくが、各集団の構成員数は、それぞれ、一三名、二〇名、約一〇名<sup>5)</sup>、一九名、一一名、一〇名および五名であった。

クービック秋集団のキャンプ構成は図1の秋キャンプ3に示す通りであり、三世帯から成っていた。各世帯は、核家族から構成されていた。三世帯のうち二人の世帯主は兄弟(2と3)であり、この二人は、世帯1の世帯主の母親と義理の兄弟姉妹

関係にあった。この集団は、兄弟関係と義理の兄弟姉妹関係を中心として形成されていた。

イヤイツイット秋集団の構成は図1の秋キャンプ2に示す通りであり、四世帯から成っていた。この表を見てもわかる通り、もともとは一つの核家族を構成していたが、父親が死去し、男性の子供が成人し、世帯をかまえたことがわかる。この秋集団は、一種の大家族から形成されており、兄弟関係が集団形成の基盤となっていた。

ウガシウビック秋集団(秋キャンプ1)は、HBC交易所の記録によると、四世帯から構成されていたらしいが、インタビューからは一世帯に関して情報を得られなかったため、この不明世帯(便宜上、世帯11と呼んでおく)は図1には記載しなかった。世帯8、9、10から得られたデータに基づいていならば、この秋キャンプ集団は一つの大家族から構成されており、その中核的關係は世帯主9と10の親子関係や世帯主9と8の義理の親子関係すなわちニガウ(nigau)関係であった。ケイブ・スマミス社会では、通常、父―息子関係と兄弟関係が社会的・経済的に重要な関係であったが、秋キャンプ1では世帯主9と8にみられる義理の父―息子関係も重要であった。ニガウ関係には、男性エゴと彼の娘の夫との関係、男性エゴと彼のメイの夫との関係、男性エゴと彼の姉妹の夫との関係、二人以上の男性が姉妹と結婚することによって形成される義理の兄弟関係や男性エゴと彼の女性の第一イトコの夫との関係等が含まれてい

る。これらのニガウ関係は血のつながった親子関係や兄弟関係が弱かったり、存在しないような場合には、キャンプ集団を構成するための中核的な関係として機能することがあった。

ナイト・ハーバー秋集団1の構成は、図1の秋キャンプ4に示した通りであり、三世帯から構成されていた。世帯12は、もともとは異なる二つの核家族から形成されていたが、これらの核家族の家長（一人は死去）は、もともと狩猟パートナーであった上に、この二つの核家族は婚姻を介して結びついていた。世帯12と13との間には、兄妹関係が存在していた。従って、この集団は、親子関係、兄妹関係および婚姻関係を基盤として形成されていた。

ナイト・ハーバー秋集団2の構成は、図1の秋キャンプ5に示す通りである。このキャンプは二世帯から成っているが、一つの大家族から形成されていた。この集団の中心的関係は、親子および兄弟関係であった。

クイラックIIヒングアック秋集団の構成は、図1の秋キャンプ6に示す通りであり、三世帯から形成されていた。この集団構成は、一つの大家族の一部とも言えるが、その中心的関係は、姉妹と結婚した二人のハンターとその姉妹の兄との間の義理の兄弟関係（*ringuak* 関係）であった。

マニツイット秋集団の構成は、図1の秋キャンプ7に示す通りであり、一世帯のみから形成されていた。この集団は、一つの核家族から成り、親子関係が中核的な関係であった。

要約すれば、秋キャンプ集団の平均構成世帯数は、二・七世帯で、平均構成員数は、一・二・六人であった。七事例中五例では、親子関係や兄弟姉妹関係が中心的関係であり、二例では婚姻によって形成されたいわゆる義理の兄弟関係や親子関係すなわちニガウ関係が中心的関係であった。

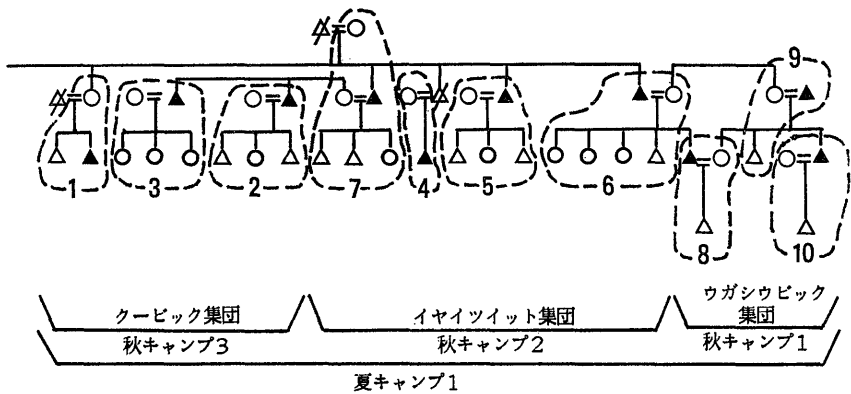
## B 冬キャンプ集団

ケイブ・スミス・イヌイットの冬キャンプ集団の形成は、いかなる経済活動パターンを採用するかによって、変化していた。ワナ猟重点型経済パターンをとる年には、各々の秋キャンプ集団は、冬になってもそのままそれぞれのワナ猟地がある秋キャンプ地区にとどまり、そこで四月末頃まで過した。この場合、冬キャンプ集団の規模や構成は、秋キャンプ集団のそれと同じであった。これは、ワナ猟を効率よく行なうためには、小規模集団の方が適していたからであった。各キャンプ集団は、クリスマスの時にのみ、ケイブ・スミス島上のHBC交易所の近くに行き、他の秋グループとともに一時的に大規模な冬キャンプを形成した。

呼吸穴猟IIワナ猟均衡型経済パターンや呼吸穴重点型経済パターンをとる場合には、イヌイットは冬キャンプをケイブ・スミス島上につつ形成した。特に、呼吸穴重点型経済パターンをとる年には、ケイブ・スミス・イヌイットのすべての秋キャンプ集団が集結する以外に、隣接地域のポプングニツク・イヌイット



## 季節的キャンプ集団の構成(1934年)



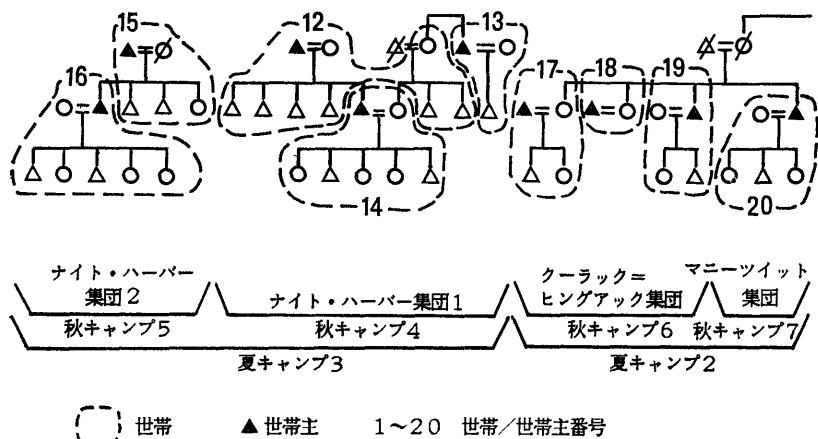
冬キャンプは、この図の全体から構成されていた。(年によっては秋キャンプがそのまま冬キャンプ集団となった。また世帯11は本来、秋キャンプ集団1の構成部分であったが、世帯構成に関する詳細が不明のため、この表では省略してある。)

もこのキャンプに加わる」とがあった【HBC Record, Cape Smith post B398/a/6 1932/1933; B398/a/10 1938/1939】。

この冬キャンプは、通常、ケイブ・スミス島上であったが、一二月半ばから四月末までの間に、どこで呼吸穴猟や別の方法によるアザラシ猟を行なうかによって、二回か三回かその位置をかえたりしい。HBCの交易所日誌によると、一九三三年四月には約一四〇名のイヌイットが、ケイブ・スミス島上の冬キャンプにいたという【HBC Record, Cape Smith post B398/a/6 1932/1933】。当時のケイブ・スミス・イヌイットの人口は、カナダ政府の資料によつて七二名【Public Archives Canada RG 85, Vol. 835, File 7415】と九四名【Public Archives Canada RG 85, Acc 84-85/554 Box 2】との間であったと推定されるので、約五〇名以上のポングニツク・イヌイットも、ケイブ・スミスの冬キャンプにいらしい。ポングニツク・イヌイットに関するデータは、これまでの調査では収集できなかったので、本稿では、ケイブ・スミス・イヌイットに關してのみのデータを利用して再構成した冬キャンプ集団を提示する(図1)。

冬キャンプ集団の構成は、図1の冬キャンプに示す通りであり七つの秋キャンプ集団(二〇世帯)から構成されていた。一見したところ、このキャンプ集団は、三つの独立した親族集団からなり、そのうち二つの親族集団は、婚姻によって結びついたりいくつかの小規模の親族集団から構成されていた。

図1 ケイブ・スミス・イヌイットの。



冬キャンプ集団の構成上、興味深い点は、図1の秋キャンプ2、3、6および7集団の中心人物は、それぞれ血縁関係によって結ばれており、拡大家族（の一部）であると考えられることである。この拡大家族集団は、婚姻によって、秋キャンプ1集団に結びついており、秋キャンプ1、2、3、6、および7集団がケイブ・スミス島上の冬キャンプの中核的親族集団を形成していた。秋キャンプ4は、二つの拡大家族が婚姻を通して形成され、秋キャンプ5は一つの拡大家族から形成されていた。従って、冬キャンプ集団の構成をみると、複数の拡大家族から形成されていたと言えよう。また、血縁関係や婚姻関係が、集団形成の中心的役割を果たしていることは事実であったが、秋キャンプ4や5が冬キャンプの構成集団であることからわかるように、他の要因も、冬キャンプ集団形成に関与していたことが分かる。

大規模な冬キャンプ集団形成の他の要因として、冬場の生業としてイヌイットが呼吸穴猟を行っていたことが考えられる。呼吸穴を利用したアザラシ猟では、捕獲頭数を最大にするためには、多数のハンターを必要としたからであった【KISHIGAMI 1987】。このため、他の季節には隣接地区で生業活動を行っていた相互に親族関係が無いキャンプ集団が集結し、冬キャンプを形成したと考えられる。

この大規模な冬キャンプは、食物分配（food sharing）の最大単位でもあった。一九三三年はアザラシ猟が不振の年であ

ったが、一頭のアザラシが一四〇名余りのイヌイットによって分配されたことが記録に残っている[HBC Record, Cape Smith post B398/a/6 1932/1933]。さらに、このキャンプ集団は、社交や娯楽としてのゲーム大会がとりおこなわれる最大の単位でもあった。

### C 春キャンプ集団

春キャンプの期間は、五月頃から七月頃までであった。四月の終りになるとケイブ・スミス島上に形成されていた大規模な冬キャンプは、規模や構成において秋キャンプ集団とほぼ同じ集団へと分れた。

これらのキャンプ集団は、五月頃には、ケイブ・スミス島上ないしその周辺のいくつかのキャンプ地に分散し、固定水のふちでのアザラシ猟に従事したり、昼寝中のアザラシをとったり、湖や川で氷上からホッキョクイワナや陸封性ホッキョクイワナを取った。六月には、秋のキャンプ地区へと帰り、七月の定期船の来航まで、アザラシ猟や漁労に従事した。

また、夏に備えてカヤック（アザラシ皮を張った小型ボート）を新たに製作したり、補修したりするために複数の春キャンプ集団が、短期間集合し、比較的大きな協劣キャンプ集団をいくつか形成することもあった。

### D 夏キャンプ集団

七月に海水がとけると、春キャンプ地に分散していたイヌイットは、カヤックやビーターヘッド・ボート<sup>(6)</sup>に乗って、ケイブ・スミス島へと帰ってきた。夏に、イヌイットがケイブ・スミス島へ帰ってきた理由は、南からの定期船がやってくるのを待つことと、同島周辺に回遊する多数のホッキョクイワナを捕るためであった。そして、同島上には、三つの夏キャンプが形成された。

夏キャンプ集団1の構成は、図1で示す通り、秋キャンプ1、2および3から成っていた。この夏キャンプ集団は、一〇世帯、四二名からなるが、その内容は、婚姻によって関係づけられた三つの大家族から形成されていた。

夏キャンプ集団2は、図1で示す通り秋キャンプ6と7から成立っていた。そしてこの四世帯は、一つの大家族の一部であった。

夏キャンプ集団3の構成は、表1上の秋キャンプ4と5というナイト・ハーバー地区で秋キャンプを形成していた二つの独立した親族集団から形成されてきた。すなわち、一つの大家族（秋キャンプ5）と婚姻によって結びついた二つの大家族（秋キャンプ4）とが地縁に基づいて結びつけられていた。秋キャンプ4と5の成員であった世帯主12、13や15は、もともとポングニツク／イヌジュアックという南の出身であり、ウングバ湾のカングスジュアックという北の出身である他の世帯主（例えば、9、6、5、7、2、3など）とは、一九三四

年当時、相対的に社会的距離を保っていた。一方、秋キャンプ4と5とでは、親族関係はなかったものの、同一地方の出身である上に、秋期や春期には近接地域で狩猟やワナ猟活動に従事していたため、他の秋キャンプ集団と比べ、比較的よく、カヤックづくりや白イルカ狩猟を協同して行なうことがあった。

以上から分かるように、夏キャンプ集団1は、三つの秋キャンプ集団から構成されていたが、その構成原理は、血縁と婚姻関係であった。夏キャンプ集団2の場合は、二つの秋キャンプ集団から形成されていたが、その構成原理は血縁関係であった。一方、夏キャンプ集団3は、二つの秋キャンプ集団から構成されており、この二つの間には血縁関係はなく、地縁関係（隣接性）に基づいて形成されていた。

この三つの夏キャンプは、七月初め頃から定期船が来航するまで、約三ないし四週間連続し、その後は、再び秋キャンプ集団に分散し、九月終り頃まで、ケイブ・スマイス島の周辺でホッキョクイワナ漁とアザラシ猟に従事した。

以上、ここでは、一九三四年ケイブ・スマイス・イヌイットの事例を用いて、季節的キャンプ集団の周期的変化を概述した。

#### 四 小 結

接触＝伝統期におけるケイブ・スマイス・イヌイット社会で可視的にかつ識別可能な居住集団は、世帯とキャンプ集団であった。冬キャンプには、ポングニツック・イヌイットが加わる

こともあったが、ケイブ・スマイス・イヌイットの社会は、通常二〇世帯（うち不詳一世帯）から構成されていた。一世帯あたりの平均員数は四・五名であり、一九世帯のうち一七例は核家族から、一例は拡大家族から、一例は二つの核家族から形成されていた。

一世帯が、一年中、他の世帯と孤立してキャンプ集団を形成することは稀で、他の世帯と連合してキャンプ集団を形成していた。一年を通じてのキャンプ構成の周期的変化を見た場合、秋キャンプや春キャンプの比較的小規模な集団が、一つの基礎的社會単位として作動していたと考えられる。その基礎的集団は、ダマスのいう狩猟＝ワナ猟ベースキャンプ [Damas 1988] に相当するが、冬キャンプ集団や夏キャンプ集団は、秋キャンプ集団が連合して形成されていた。

基礎的社會単位である秋キャンプ集団は、親子関係、兄弟姉妹関係、婚姻によって形成された義理の兄弟および義理の親子関係 (nigauk 関係) を中心の関係として形成されていた。

冬キャンプ集団や夏キャンプ集団の形成や分散は、血縁関係（拡大家族関係）や婚姻関係を第一次的とし、地縁関係を第二次的とする原理によって秋キャンプ集団の連合という形で形成された。すでに、モース [Maus 1966] が伝統時代のイヌイット社会では冬場には大規模集団が形成され、夏場には小規模集団が形成されたことを指摘したが、接触＝伝統期のケイブ・スマイス社会も原則的にはこの社会形態の変化に対応していた。そ

して集団規模や形成期間の変化は、呼吸穴猟など生業活動の变化やキャック作りの協同労働の必要の有無と密接に関係していた。しかしまた、この時期には、ケイブ・スミス島上でのHBC交易所でのクリスマス祭や夏に年一度だけ南からやってくる定期船の到来を待つために、その時期までは見られなかつた比較的大規模なキャンプ集団が短期間にせよ形成されるようになった。さらに、イヌイットが集中的なワナ猟に従事するようになったため、小規模なキャンプ集団で冬を過すこともあった。

本稿では、一九三四年のケイブ・スミス・イヌイット社会のキャンプ集団の季節的变化を紹介し、各季節のキャンプ集団の構成原理について考察をくわえてきた。この構成原理をより正しく究明するためには、季節的キャンプ集団の構成とその変化を多時点において時系列的に比較、検討することが今後必要であると思われる。

(謝辞) スチュアート・ヘンリ先生と小池誠氏には、本稿に対し貴重なコメントを賜わった。記して感謝する次第である。

### 注

(1) このコミュニティーは特定の毛皮商人ないし交易所との毛皮交易をとおして形成されたイヌイットの集合で、集団というよりも群集のようなものであり、ベースキャンプ

とは、ホッキョクキツネのワナ猟を行なうためのキャンプ集団であった。

(2) イヌイット語では、春は、夏もどき、秋は冬もどきという表現をとる。

(3) ホッキョクキツネは、ほぼ四年周期で、その数が増減する。

(4) 一九三三・三四年のケイブ・スミス島のHBCの交易所日誌には、交易相手のイヌイットの名前、だれとだれが連れだつて交易所を訪ねてきたかや、秋や夏などにだれがどの地域でキャンプを行なっていたかが記載されている。

また、カナダ連邦政府の人口登録のため、イヌイットの出生年(死亡年)や登録番号が、各々のケイブ・スミス・イヌイットについて記録が残っている。筆者は、これらのデータを、一九八六年当時、八〇才、七六才、および六六才の男性とのインタビューで得た系図、世帯構成などに関する情報とを総合的に比較検討することによって季節キャンプの再構成を行なった。

(5) HBC交易所の記録(一九三四)によると、Onenkというハンターの名がみられるが、筆者によるインタビュー調査では、この人物と彼の家族についての情報を入手することができなかった。

(6) ピーターヘッド・ボートとは、カナダや英国で製作された中型の先端がとがった木製船舶である。有能なワナ猟

師のイヌイットは、毛皮交易で蓄積した蓄えによって、このボートを購入した。

(7) これは、不詳の一世帯を除外した数値である。

(8) ケイプ・スミス・イヌイットの居住集団構成については、一九五九年 (Balkei のフィールドノート)、一九七三年 (Laval Univ. 調査隊のフィールドワークの結果) および一九八六年 (岸上のフィールドノート) のデータが存在し、今後、時系列比較を行ないたい。

#### 引用文献

- DAMAS, D. 1969 Characteristics of Central Eskimo Society, in *Contributions to Anthropology: Ecological Essays*, D. Damas, ed., Bulletin 228, Ottawa: National Museum of Canada. pp. 40-64.
- 1988 The Contact-Traditional Horizon of the Central Arctic: Reassessment of a concept and reexamination of an era. *Arctic Anthropology* Vol. 25(2): 101-138.
- KISHIGAMI, N. 1987 The Hudson's Bay Company Fur Trade and Non-seasonal and Seasonal Migrations Among the Cape Smith Inuit of Northern Quebec. A Paper presented at a session "Fur

Trade Policies in the Eastern Arctic and Sub-arctic", Canadian Ethnological Society, Annual Meeting, Laval Univ., Quebec City, May 16, 1987.

岸上伸啓 一九八八 「イヌイット社会における養子縁組の

変遷: 北ケベック・アクリビック村の事例を中心に」

『季刊人類学』第一九卷四号、一〇〇—一三三頁。

MAUSS, M. 1906 Essai sur les variations saisonnières

des sociétés Eskimos: Etude de morphologie

sociale, *Année Sociologique* 9, 1904-1905, pp.

39-132. (一九八一 宮本卓也訳『エスキモー社会』

未来社)

MORANTZ, T. 1982 *An Historical Chronology of South-*

*eastern Hudson Bay, 1810-1870: Outlining the*

*First Encounters between the Inuit and the*

*Hudson's Bay Company*. Manuscript.

なお、ハンソン湾交易会社の日誌およびカナダ政府の公文書

の引用箇所は本文中に示してある。

(おしがみ・の・あひる 早稲田大学助手)